

主 題：救われる信仰と救われない信仰

聖書箇所：マルコの福音書 11章 1-26 節

エルサレムに向かってイエスと弟子たちは旅を続けて来ましたが、いよいよ十字架にかかるその週がやってきました。イエスはこの時もさらに人々に大切なことを教えておられます。今日の箇所には日曜日から火曜日までに行われた出来事が書かれています。この出来事とおしてイエスは私たちに、信仰者としてどうあるべきか、そして、未信者には神が何を望んでおられるのかを教えてゆかれます。

1. エルサレム入城 1-11 節

一行はエルサレムの近く、ベテパゲ、ベタニヤに近づいたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出されます。ろばの子を連れてくるようにと。これはもうすでに備えられていました。この超自然的な出来事はイエスが誰であることを明らかにします。人々の行為—自分たちの上着をろばに掛け、上着を道に敷き、ホサナ！と叫ぶ—これらはイエスを王として深い尊敬をもって迎え入れることです。イスラエルでは大きな祭りのとき、詩篇 113 篇から 118 篇の六つのみことばを歌いました。これは出エジプトを記念する過越しの祭りです。その過越しの食事の前には 113-114 篇を、食事の後では 115-118 篇を歌いました。マルコ 11：9 は詩篇 118 篇の引用です。ホサナとはギリシャ語でホシヤナ、また、ヘブル語の音訳はホシヤ・ナです。「われらを救ってください」の意味です。118：25「ああ、主よ。どうぞ救ってください。」という神への祈りの引用です。救いはこのイエスによってもたらされるのだと歌います。10 節にある「われらの父ダビデの国に。」は 118 篇には見られません。このとき、人々の思いはイエスがダビデの子孫と結びついていたのです。このように、9, 10 節の過越しの祭りで歌う賛美を人々はイエスに向かって歌いました。

そして、エルサレムへと入って行きます (11 節)。これは旧約聖書の預言の成就です。ゼカリヤ 9：9「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのとこに來られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。」、神が約束されたメシヤなのです。マタイの福音書のこの並行箇所にはこのゼカリヤのことばが引用されています。それはマタイの読者はユダヤ人だからです。預言の成就なのです。しかし、このように人々はイエスをメシヤだと賛美しながら、イエスが本当は誰であるのかをよくわかっていないのです。イエスご自身がこれまで何度もそれを明らかにして來られたにもかかわらず、弟子たちでさえわからなかったのです。ヨハネ 12：16 に「初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、…彼らは思い出した。」とあるように、後になってわかるのです。人々が求め待っていたのは、自分たちをローマの圧制から解放してくれるメシヤだったからです。

⇒ここで私たちは自分の行動を省みましょう。信仰は神と私個人のことです。それは成長して行きます。神を愛するがゆえにすべてのことを神のためにしているでしょうか？人がするから…、人が言うから…、ではないのです。

2. ベタニヤからエルサレムへ 12-14 節

月曜日の出来事です。いちじくの木にイエスはのろいをかけられます。これは神の警告です。いちじくはこの過越しの祭りの頃 (4 月) には実がありません。葉が茂っています。3 月の終わり頃みどりの実がみられますが、初夏に実がなり、初なりのいちじくと言われます。そして 8 月中旬から 10 月にもう一度実がなります。秋いちじくです。マタイ 21：19 にはイエスが木に向かって「おまえの実は、もういつまでも、ならないように。」と言われると、「木は枯れた」と記されています。このいちじくとはイスラエルのことです。この表現は旧約聖書でよく使われています。葉が茂っているのに実がない、これは彼らは宗教的に熱心だが心が堅く閉ざされていると、イスラエルの人々に対して繰り返し言われた警告です。

⇒私たちもことばだけのむなしい信仰者になっていないか、自分を吟味するべきです。ことばに伴う行いができているかどうか、神と心がつながっているか、と。

3. エルサレムでの出来事 15-19 節

これはイエスの宮清めです。この当時は第三神殿、ヘロデの神殿です（第一はソロモンの神殿、第二はゼルバベルの神殿）。そこには異邦人の庭と呼ばれる所があり異邦人が礼拝をします。そして、彼らが神殿にお金を捧げる時、通貨の両替が必要になります。一人20シケルを捧げること、また、貧しい人は鳩を捧げること、これらは正当な捧げものです。彼らの便宜を計って両替商や鳩売りがいるのですが、これの許可は大祭司アンナスが与えていました。両替人たちはその権利を悪用して、ときに高利、高値で不正な利を得ることがありました。異邦人の庭でこれらのことが行なわれていたのです。17節にある「『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしたのです。」は、イザヤ56:7とエレミヤ7:11の引用です。神殿は祈りの家だとイエスは言われます。

⇒私たちの信仰は形式的になっていないでしょうか？初めの愛から離れていないでしょうか？奉仕も何のためにしているのか考えなくなっていないませんか？インド独立の父といわれるあのガンジーはキリスト教を求めて教会に行ったとき、“教会は社交の場、神を敬うものは何もない”と辛辣な感想を述べています。私たちは自分自身の信仰を常に吟味することが大切です。形骸化していないか、いちじくのようになっていないか、と。もしそうなら、神は必ずさばかれます。

20-26 節は次週見てゆきましょう。